
ありがとう

nagoyan

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ありがとう

【Nコード】

N2047D

【作者名】

nagoyan

【あらすじ】

とある男子校に通う俺。毎朝の通学電車からの恋…その結末は？

1章

春の温かい朝日を浴びて電車を待ってる。今日からまた一週間の始まりだ。ホント眠くなるくらいの快晴だな。桜の花もほとんど残ってない。

俺は岡本健太。先週17歳になったばかりの高校2年生。自宅の最寄り駅から30分かけて田んぼの真ん中にある豊和高校に通ってる。とにかく見渡しの良い学校だ…

そんなこんなで、平凡な高校生活を送っていたのだが、最近というかこの4月から、少し楽しみがある。朝の電車に2つ先の駅からめちゃくちゃ可愛い子が乗ってくるんだ。去年も何度か見た事あるから、2年か3年生だろう。それがこの4月からは毎朝同じ電車に乗ってくる。「男子校に通う俺にはこの上ない目の保養だな」くらいにしか思ってたんだけど。電車の30分は貴重な睡眠時間だけど、それを削ってでも見ていたいくらいとにかく可愛い。

ほら、今日もだ。あの制服は東野高校だよな。東野高校は、俺の高校の駅より3つ先で降りるんだろう。俺が降りる駅の一つ前から彼女の友達が2人乗ってくる。それまではすごく大人しそうに見えるのだが、友達とわいわい話していると、元気のいい近頃の子って印象だ。

東野高校といえば、洋介と同じだ。浦田洋介。小・中と同じだった、俺の幼馴染みで、東野高校の野球部。あいつは毎日朝練だから、ずいぶん早い電車で行ってるはず。でも帰りは、部活終わる時間が同じくらいだから、たまに一緒に帰ってくるんだ。

そうだ、あいつにあつたら、あの可愛い子知ってるか聞いてみよう。

て事で、早速その日の帰りに洋介に聞いてみた。

「あのさあ、森島堂から東野に通ってる子知らん？最近あそこから東野の女の子乗ってくるんだけど」

「ああ、あんな所から乗ってくるのは菅沼って子だな。菅沼綾。同じクラスの子だよ。それがどうかした？」

「同じクラスなん？えーな。めっちゃ可愛くない？」

「まあ普通に可愛いね。かなり人気あるし。でもうちの野球部の奴と付き合ってたけどねー」

「…なーんだ。そりゃあんな子放っとくわけないよな。マネーじゃーなん？」

「いや、合唱って言ってたっけな。うちの合唱部強いから、練習大変みたいやわ。俺ら代える時もまだ電気ついてるから。で、その彼は練習終わるまで待ってるのさ。」

こんな感じで洋介から色々聞いたわけだが。生まれたての恋心はあっさりと破れ去ったのであった…。話した事もなければ面識もないのに、勝手にショックを受けて、俺は何しとんねんって笑って片付けることにした。

それから彼女は毎朝同じ電車に乗ってきた。しばらくは、今まで程には彼女に魅力を感じなくなり、「あ、今日もいる」と確認するだけですぐに寝ていた。この時期、もうすぐ春の大会だから練習がキツくなって、眠気を誘いまくるのだ。あ、ちなみに俺は剣道部ね。幸か不幸か、部活の事とか色々と考えた事があったので、彼女へのモヤモヤした気持ちはいつの間にか消え、次の週には、今までのように電車の中では寝ずに、彼女を見ている方が多くなった（怪しいか…）

そんな感じになってからは特に何の変化もなく、部活中心の生活を過ごしていて、朝彼女を見る事も当たり前になっていったのであった。

そんな当たり前の日々を重ね、日差しの強い夏を迎えつつある。

月のある日、帰りに洋介と一緒にになった。

「おつす。なあ健太、来週の日曜暇？」

「まあ日曜は部活無いけど。何かあんの？」

「うちの合唱部のコンクールなんだよ。一緒に行かね？」

「そーゆーのはお前の彼女と行けばいいーやん」

「あいつその日大会なんよ」

「弓道だっけ？そっか…てか野球部って日曜部活だろ」

「ところがどっこい。一昨日夏の大会で負けて3年が引退してさ。

夏休みまで日曜は無いんだよ。で、行くの？行かないの？」

「ん…ま、暇だからいいよ」

と、あまり気が進まない返事をしたのだが、内心は結構テンションが上がってたんだけどね。「合唱って事は菅沼さんいるじゃん。歌ってる姿はどんな感じなんやろ」ってな具合で、すごく楽しみになってきたのであった。

それから当日まではまた毎朝彼女に注意を注ぎ、別にデートするわけでもないのにドキドキワクワクを繰り返していた。俺って単純なんだなと思いながら、この気持ちをとて心地好いものと感じていた。

コンクール当日。観客席にいる生徒はみんな制服だったから、俺1人だけ豊和の制服で少し目立ってしまったかもしれない。うちの高校は合唱部無いんよ。洋介に連れられて席に座ると洋介が指さし、

「ほら、あの前にいる3人の真ん中が菅沼の彼氏。3人とも野球部だよ」

なるほど。野球部らしく髪が短く、背も高そうだ。横顔だけ見えたが、爽やかな感じだ。あいつか。…お似合いだな…

東野は最後から3番目の演奏だった。東野の生徒が舞台に出てきて、すぐに彼女を見つける事が出来た。

「やっぱ断トツで可愛いな、菅沼さん」

「あんま大きい声で言うとな、彼氏に聞こえて怒られるぞ」

「やべつ。彼氏恐いの？」

「いや、普通にいい奴だけど。彼女想いな奴だよ」

ぷしゅ。やっぱこーゆー話し聞くと凹むんだよな。まあいいんだ。今日は歌ってる彼女を見に来ただけだから。

東野の演奏が始まった。I wishの「明日への扉」だ。俺は川嶋あいの声が大好きだから、この曲を聞くと鳥肌が立つんです。合唱用にアレンジされた曲は、耳が喜ぶのが分かるくらい美しかったです。しかし、そんな曲を聞きながらも、目と頭の中は彼女をしつかりと捉えていた事は言うまでもないだろう。

心洗われる歌に酔って会場を後にしてからも、俺の目、耳、頭ん中はさっきの映像が離れなかった。久々に感動したや。そして…やっぱり彼女は可愛かった。

2章

それからすぐ夏休みになり、部活だけの日々が続く。朝彼女を見る事も無くなった。「部活の時間が違うんだろ？」と軽く凹みながら電車で寝ながら部活に行く。高校の夏休みの部活は今年が最後だからと、とにかく練習ばかりして過ごした。ついには「早く学校始まらんかな」と、高校生らしからぬ事まで考えていた。

待ちに待った(?) 9月。いつものように彼女も電車に乗って来るのだが、どこか元気が無いように見える。途中から乗ってくる友達と話してる顔も、今までの笑顔とは違う感じだった。「夏バテでもしてるのかな」くらいにしか思っていなかった。

しかし、9月の終わりに近づいてもずっと夏バテしている。違う、夏バテじゃないのかなと思い、洋介にそれとなく聞いてみた。

「東野で風邪流行ってる？」

「んな事ないけど」

「夏バテは？」

「もうこの時期にはバテないだろ」

「だよな。東野で元氣無い人がいるみたいなんだけど」

あえて誰か分からないように言ってみた。

「菅沼か？」

ちっ、なぜ分かった…

「そおそお。9月の頭からずっと夏バテっぽくてさ。今日もまだ具合悪いみたいだったし」

「うん…夏大変だったんだよ…」

「合唱ってそんなに大変なん？」

「違って。あいつら夏の間に分れたんだよ」

「え、マジで？なんで？」

「彼氏の方が地元の元力ノと戻りたいって。夏の大会で負けた試合

をその元カノが見に来てて、試合の後に会って色々話してたみたい。あいつも悩んでたらしいけど、結局は8月になってすぐ菅沼に言っ
て別れたんだって」

「ずいぶん一方的やな。『他の人と付き合うから別れて』なんて言
われて納得できんやろ」

「だからあいつは『お前モテるだろ？だからお前といると色々気に
しなきゃいけないし疲れるんだよ』って言ったって。本心かどうか
は分からんけどな」

「いやいや、本心じゃなくても言われた方は相当なダメージやろ…
うわぁ…」

「学校では何ともなかったようにいるけど。そりゃ無理だよな」
俺もなぜか凹んだ。彼女の事を何か聞く度に凹んでいる気もするが、
それだけ俺の中で彼女の存在が大きくなっている事は確かだ。ただ、
だからといってどうする事もできない。洋介から聞く話で凹む事し
か…

夏の出来事を知ってから彼女を見ると、今まで以上に元気無く見
えた。力がないというかフワフワしてるというか。見ていて辛いと
思う時さえあった。

そんなある日、朝、駅で電車を待っていると洋介がやって来た。
あいつ朝練のはずなのに…

「よっ。ゆっくり起きるって気分良いな」

「朝練サボったのかよ」

「人聞き悪いな。うちら今日から試験なんだよ。で、うちのキャ
プテンが『試験の日は朝練無くしてくれ』って言ったらそれが通っ
てさ」

「そんな権力持ってるの？」

「そいつ学年1位だから、成績下がったら部活辞めるって親が顧問
に言ってきたらしいよ」

「高校生になってもそんな親いるんだ…」

「ま、それで朝ゆつくりできるんだから。こっちとしても助かるぜ」

その時、森島堂に着いた。

「あれ？浦田くん朝練は？」

彼女が乗ってきて、いつもいないはずの洋介を見つけた。

「今日から試験中は無いんだ」

「そうなんだ。おはよう」

「おはよう。勉強どんな感じ？」

この時ほど洋介をうらやましいと思った事は無かった。その時、洋介がナイスタイミングで、

「あ、こいつ同じ小・中に通ってた健太ね。豊和の剣道部」

さすが洋介。俺の心が読める奴だ。

「どうも、岡本健太です。こないだのコンクール、洋介と一緒に見に行きました。マジで感動しました」

「そうだったんだ。ありがとう。私は菅沼綾です」

めーっっちゃ緊張した。びっくりするくらい。いやあ、「洋介ナイス」って目で合図したら、あっちも「だろ？」みたいな合図を返してきた…と思いきや、

「こいつ前からずっと『森島堂に可愛い子いる可愛い子いる』ってうるさかったんだよ」

お前…余計な事を。

「だからコンクールにも連れてってさ。そしたらさらに惚れちゃって」

「おい洋介…（その口を縫ってやるーか）」

「またまたー。でも歌で人を感動させたのなら、すっごく嬉しい」

と、思わぬ展開から冷や汗タラタラの朝でしたが。学校に着いてから思い出すとニヤけてしまう。それにしても、きれいな声だったな。笑った顔も可愛かったし。ただ、洋介が余計な事言ったから、それ

で引かれてないかが非常に心配だった。

その週は、毎日彼女と話した。もちろん、洋介を仲介してだけどいきなり、

「岡本くんは彼女とかいないの？」

「と聞かれた時は、生きてて一番顔に血が通ってる事を確認した。少し期待して、

「…いないよ」

「そっか。男子校だと大変よね」

「ですよー。はい終了」。まあ、俺が固まってるって洋介が面白いこと言ってくれるからね。いい奴だ。

と、楽しい一週間が過ぎて。次の週になると、もちろん洋介は朝練だから来ない。うわーどうしよう。ずっと寝たフリしてるか？いや、そんなの毎日続けられない。んー、何て話そう…

そんな事を考えてるうちに彼女がやって来た。

「岡本くん、おはよう」

「あ…おはよ」

「具合悪いの？」

「全然。元気たっぷりだよ」

たっぷりって…

でも大丈夫だ。普通に話せるや。これでチキンな俺とはお別れだな。いやー、それにしても清々しい朝だ。途中から乗ってくる彼女の友達は、何故か気を使ってあいさっただけして、少し離れたところへ行く。何だか照れるが、彼女は特に気にした様子が無かったので俺も気にせず話した。

3章

あまりに楽しい日々だったので、彼女の心の傷の事を忘れていた。話している時は楽しそうに見えるし、明るい子にしか見えない。でも傷を隠して楽しそうにしているのなら、俺が彼女に無理させているんだよな。自分の楽しみしか考えていなかった事を後悔した。これからどうしよう。困った…そんな時は…

「おっす、洋介。あのさあ、菅沼さん学校でどんな感じ？」

「どうって、普通だけど。また何か変なん？」

「そっいうわけじゃないけど。最近話していると楽しそうにしてるけど、本当はどうなんだろうなあって思っ

「聞いてみりやええやん」

「簡単に言っただねえ。まだ話すようになって間もないのに聞きにくいやんか」

「まあな。でも『岡本くん、いい人だね。楽しいよ』って言うてるよ」

いい人ね…なんかよく聞く単語だ。

次の日、いつものように話して、それと同じノリで聞いてみた。

「菅沼さんって彼氏いないの？」

彼女の顔を、ものすごくうかがった。

「ああ、聞いてちゃったか」

「あ、じゃ聞かなかった事にして」

「いやいや、別にいいよ。今はいないんだなあ。夏にフラれちゃってね。そろそろ彼氏探し始めるかな」

特に変わった様子は無かった。普通に話してる感じがした。これをどう捉えたらいいのか分からなかったが、話してて楽しいという事実に変わりはなかった。

それから彼女の心の傷の事など忘れ、毎朝楽しく話していた。

衣替えの時期になり、風も冷たくなってきた頃、彼女が唐突に、

「岡本くんって新人戦いつ？」

お、これはもしや応援に来てくれるとか？

「来週の土日だよ。なんで？」

「そっか。よかった」

あ、違うのね…

「あのね、私たちの定演が再来週の日曜にあるの。よかったら聞きの来てほしいなあと思って。忙しい？」

「行く」

という事で、東野高校合唱部の定演に行く事になった。その日洋介は練習試合だから、1人でいくというサプライズ(?)

そして当日。朝、メールで「岡本くんどこにいるか探すから、前の方に座ってね。曲の間に合図するから」と来て、テンション上がりまくりで会場まで向かった。言われた通り、前から5列目に1人で陣取った俺は、周りの人にどう思われたのだろう。でも、そんな事どうでもよかった。早く始めろとばかり思っていたのだから。

いよいよ開演だ。舞台に出てくる生徒の顔を探して…見つけた。

「彼女からの合図を見落とすもんか」とばかりにずっと見ていた。

一曲目が終わった時、彼女は目線を動かし、俺を探しているようだった。気付いてくれー。願いが通じたのか、目が合った。自然とお互い笑顔になり、彼女はウインクして見せた。あの時の胸の高ぶりは、それまで経験した事のないものだった。

定演は、午後3時頃終わった。終わってから彼女も反省会とかあると言っていたので、俺はそのまま帰った。本当は、終わってから話したりしたいなあとは言ってたんだけど。

夕方5時過ぎ、家でくつろいでいた所に彼女から「今終わった。もしよかったらさ、今から森島堂まで出てこない？ほら、今日定演

の後に話したいって言うてくれてたじゃん。駅の近くに公園あるから、そこでどうかな？」と言ってきた。部屋着になつてた俺は、すぐに着替えてその公園に向かった。緊張しつつ、喜びつつ。

公園に着くと、まだ彼女は来てなかった。あと5分ほどで来るらしい。そこは、大きくはないが、シーソーやブランコといった定番メニュー（？）のある、静かな公園だった。2人でゆっくりするにはいい場所だな、と考えたので、ニヤついてしまったかもしれない。

そして彼女が来た。

「ごめんごめん。呼んどいて待たせちゃって」

「お待ちしておりました」

「今日は来てくれてありがとう。ウインクしたんだけど、分かった？」

「もちろん。嬉しかったよ。俺も返そうと思ったけど、ウインクなんてできんし……」

「投げキスでもしてくれればよかったのに」
と言うて、いたずらっぽく笑う顔もいいなと思った。

それからしばらくいつものように楽しく話し、最後に大事な話を
してその日は帰った。

そう、この日から俺と彼女は付き合い出したのだ。どっちからどんな風に告白したかって？そんなの教えねえよ。だって照れるやん。いいんだよ、付き合う事になったんだから。

それからの日々は、「人生ってなんて楽しいんだ」としか思えなかった。朝の電車の中、休み時間のメール、綾が日曜休みの時は出かけたり、と。洋介に言うて驚かそうと思ってたら、あつちから、
「お前、菅沼と付き合うんだってな。よかったやん」

と言われ、逆に驚かされたり。学校で綾が自慢げに言うてきたらしい。

「『浦田くんは私たちのキューピットだからね』とか言われたよ」
と洋介も嬉しそうだ。マジこいつには感謝せんとな。アイスでもお
ごつてやるか…

4章

さて、年末が近くなってきた頃。世の中は完全にクリスマスモード。去年は部活のみんなでカラオケしてたな…独り身の男ばっかで、でも今年はみんなに、

「悪い、クリスマスは予定あるんだ」

と言って、お決まりの冷やかしを受け。24日は俺も綾も部活が夕方までだから、終わってから街のイルミネーションを見に行く事にした。キラキラピカピカしてる物が好きらしい。ロマンチックやなあ。

24日。天気予報では、夜に雪がちらつくらしい。いいムードやん。そして夕方、待ち合わせた街の時計台には人があふれていた。人込みは苦手だが、上手く会えた。

「すごい人やなあ。迷子にならんといてな」

「手つないでたら大丈夫やろ。健ちゃんこそ勝手にどこか行かんといてよ」

「俺方向音痴だから」

とても寒かったけど、綾の冷たい手をにぎっていると、心地良い温かさを感じられた。

綾の好きな、ピカピカ光るツリーの形のイルミネーションがよく見えるベンチに座った。

「きれいよね。私こういうの大好き」

ベタでクサイセリフが頭をよぎった…が、言わなかった。

「はい、健ちゃん。メリークリスマス」

と言って、袋を取り出した。マフラーだ。

「昨日ギリギリで出来たの。クリスマスカラーにしてみた。」

真っ赤な手編みのマフラーだ。俺らはちょっと前に、「まだ学生だから、何か買ってプレゼントするのは無しにしよう。物より気持ち

って事で」と決めていたのだ。実際、どんな高価なマフラーより、綾が作ってくれた方がいいに決まってる。本当に嬉しかった。

俺は何も作れないから、手紙を書いてきた。4月から綾を意識するようになってから、話すようになり、とても楽しくて、付き合っているなんて信じられないくらい幸せだ、といった感じの事を、汚い字ではあるが本気で書いた。綾のマフラーの後に渡すのは少し恥ずかしいけど、その場で読んでもらった。

綾が静かに読んでる間、とにかく落ち着かなかった。が、少しすると綾が寒そうにして鼻をすすった。

「大丈夫？暖かい所行こっか？」

「ううん。大丈夫。もうちょっとだから」

そして、全部読んだみたいで、手紙をカバンに入れた。けど、何の反応もない。

「綾？」

「…うう。せつかくのクリスマスに女の子を泣かさないでよね」と言っで、目に涙を溜めながら、いたずらっぽく笑った。

「あ…え…ごめん。泣かそうとは思ってなかったけど…」

「感動してるのに『ごめん』は無いでしょ。ありがとう。とーっても嬉しいよ」

「よかった。マフラーありがとう。これから毎日するよ」

寒さと、クリスマスの雰囲気も後押しして、少しでも温かくなるように近づき、2人の初めてのキスをした。照れ隠しに笑い合っで、家路についた。

その後も、とにかく綾の事ばかり考えて生活をしている感じだ。正月、バレンタイン、ホワイトデー。そして春になり、3年生になった。

4月は俺の誕生日があるが、なんと綾は俺の5日後が誕生日だった。2人の誕生日プレゼントとして、2人とも好きな川嶋あいの子イブに行った。最初に聞いた綾の歌は「明日への扉」だったなと思

い、懐かしくも感じた。

綾が応援に来てくれた、高校最後の試合も終わり、俺は一足先に受験の事を考えるようになった。綾は最後のコンクールが夏前だから、もう少し時間があつたが、一緒に進路の話しもあるようになった。

「俺のやりたい事が一番出来るのは、関東の大学になるんだよね。綾は県内に残るん？」

「うーん、県内の看護大になるかなあ。外には出たくないって親が言ってるから」

「そつか。なら俺も県内で探してみよつか」

「こら。そりゃあ県内でもやりたい事ちゃんと出来るんなら近くにいろの方が嬉しいけど。妥協して県内に残っても口利いてあげないかんね」

綾は妥協が嫌いな子なんよ。だから、俺が本当は関東に行きたいと知って、県内に残ったらダメって言うのさ。「遠距離になったって3時間あれば帰って来れるんだし、寂しくなったら遊びに行つてあげるよ」って。ホントしつかりしてるわ。

綾の部活も終わり、夏休み。受験生にとって、勝負の時期だ。学校の補習は受けたが、それ以外の時間は市の図書館で綾と勉強した。時々、洋介カップルも一緒になったりした。

相変わらず進路は悩んでいた。どうにかして県内に残る理由を考えようとしたが、全部綾はお見通しだ。

「こら。私じゃなくて問題見て勉強しなさい」

とよく注意された。でも、自分の勉強してる時より、綾に教えてる時の方が楽しいんだもん。こういう時は、数学得意でよかったと思う。世の中に数学好きが増えたら、俺の出番がなくなってしまう……まあ、どっちみち綾しか教えないけどね。

夏休みが終わると、冬まであつという間だった。あと2週間で、2回目のクリスマスも見えてきた。

「今年はさすがに予備校だね…あ、クリスマスにお守り作り合って受験に持つてくのはどう？」

「お、いーね。でも…あの…俺縫い物できんけど…」

「んゝ、任せた。健ちゃん流のやつね」

俺流か。指を刺す覚悟で縫ってやる。

5章

24日。センター直前講座を2人で一緒に受けている。昼の休みに、

「メリクリ」。まず私からね」

と言って、赤いフェルトで作られた、ハート型のお守りをくれた。

「絶対に効くからね」

これは心強い。

「じゃ俺のも。ほら、縫えたし」

「おー、すごいやん。しかもちよつと上手いし」

「本気を出せばこんなもんよ。念力込めといたから」

「念力って…なら筆箱に付けようかな」

俺流のお守りは、紙に「綾 絶対合格」と書き、裏に「ずっと一緒にいよう」と書いて、青いフェルトで包んだものだ。両方の願いが届くといいな。

年が明け、センター試験がやってきた。お守りの効果はすごかった。綾も俺も、いつも以上の点数だった。だがそれは、俺の関東受験を決定付ける点数でもあった。もし、センターが悪かったら、ランクを落として県内にしたのだが。その事を綾に話した。

「綾のお守り、効きすぎるよ」。それで、俺、関東を受ける事にするよ。ごめん」

「なんで謝んのさ。そのためにお守り作ったんやん。頑張つてよ。私も頑張るからね」

綾は大人だな。あ、俺が子供なんだな。とにかく、今は頑張つて、2人とも喜べるようにしないと。

1月の終わりのある日。朝いつも乗ってくるはずの駅で綾が乗ってこなかった。最近朝、洋介も一緒にいるんだから、東野高校も

授業はあるはずだ。「おはよ。今日学校行かんの？」とメールをしても返ってこない。「変だな」と洋介と言いながらも、学校に行った。

学校に着いて、1時間目が始まる少し前に、洋介からメールが来た。

「おい、菅沼が今朝事故に遭ったらしい。詳しい事は次の休み時間に話す」

何の事か分からなかった。事故のニュースをテレビで見ているくらい、ピンとこなかった。休み時間までの1時間がとても長く感じられた。洋介から電話が来た。

「朝、担任が『菅沼が今朝、自宅から駅に自転車で行く途中、車にはねられた。近くの病院にすぐ運ばれたが、状態は分からない。私は今から病院に行ってくる。一度に大勢が押しかけると混乱するから、君達はまだ病院に行かないように。心配なのは分かるが、お見舞い出来る状況になったら私から連絡するから。それまではきちんと勉強してるように』って言ってた」

「まだどんな状態か分からないのか？」

「分からない。でも言い方からすると、ただ骨折ったとかじゃなさそうだなってみんなと話してる。お前の携帯には何も連絡ないのか？」

「全く。学校昼で終わるから俺行ってくるわ」

「そうしてやれ。しっかり見舞ってやれよ」

ようやく学校が終わった。俺はすぐに綾が運ばれた病院へ行き、綾の病室を聞いた。

「菅沼さんは今、集中治療室ですので、ご面会はできません」

それでも、集中治療室を探し、テレビでよく見る、赤いランプのある扉に着いた。扉の前のソファーに、1人の女性が心配そうに座っていた。綾のカバンを持つてる。綾のお母さんだろう。

「あろ…菅沼さん…ですか？」

「ええ。あなた、どちら様？」

「あ、僕岡本健太です。実は綾さんとお付き合ひさせていただいてる…」

「あなたが。いつも綾が『健ちゃん健ちゃん』と言っています。事故に遭った事をご存じで？」

「東野に行ってる友達が教えてくれて。綾さんどうなんですか？」

「頭を強く打ったみたいで、まだ意識が戻らないんです。脳に出血もあるみたいで。気持ちは分かりますが、いつ話せるようになるかわかりません。今日の所はお引き取りください。あなたも受験すると聞いていますよ。意識が戻ったらすぐ連絡しますから。今日の所は…」

何度か「もう少し待たせて下さい」とお願いしたが、お母さんも気持ちが張り裂けそうなのだと気付き、その日は帰る事にした。多少、気が動転していたようだが、しっかりしたお母さんという印象を受けた。俺の事を綾から色々聞いているみたいで、俺の事まで考えてくれる。綾に、俺とお母さんが仲良くなったところを見せて、びっくりさせたいと思った。

6章

2日後、治療室から出て個室に移ったと洋介から聞いた。が、相変わらず意識は戻らない。綾のお母さんに、会わせてほしいとお願ひしたら、特別に行ってもいいということだったので、変な緊張はしたけど、会いに行った。

病院に着くと、ロビーまでお母さんが迎えに来てくれていた。案内され、少し大きめの個室の前で手を消毒した。お母さんの後について中に入ると、一つしかないベットに、オレンジの入院着を着た綾がいた。もちろん目は閉じている。ベットの横にはいくつもの機械が綾を囲んでいて、額には事故の時の傷と思われるものがいくつもあった。そんな姿を見ながら、いつの間にか涙がこぼれていた。痛かっただろうに…あの日もいつもと同じように元気に電車に乗ってくるはずだったのに…なんで綾なんだよ…他の人じゃなくてなんで綾が痛い思いをしなきゃいけないんだよ…

しばらく病室の窓から外を見ていて、気持ちを落ち着かせていた。お母さんが「今日は帰ったら？」と言ってくれたが、頑なに「嫌だ」と言った。そして、お願いもした。

「これから毎日ここで勉強させてもらえませんか。綾の隣で」

「毎日って、あなた学校は？」

「明日からは補習だけになるんで行きません。どこにいても綾の事が気になるので、ここにいさせてください」

「そうねえ…そう言うのならいいわよ。でも、ちゃんと勉強しないと帰ってもらいますよ。綾は、自分のせいで健太君の勉強の邪魔をしてしまう事が一番嫌だと思うから。それだけはこちらから願ひします。綾のお願いとしてね」

「わかりました」

こうして、綾の病室で過ごすようになった。面会時間の最初から

最後までずっと。時々綾に話しかけたり、手をにぎったりしながら。綾につながっている機械の音しか聞こえないけど、俺には綾が必死で頑張っているのが分かった。「勉強しろよ」と言いそうにも見えた。

日曜には、綾のお父さんがいきなり来て、めちゃくちゃ緊張することもあり。お父さんは大学の先生だそうだ。風格がある…

色々ありながらも、病室で2週間ほど過ごした。依然綾は変わらずだ。俺に余計な事を考えさせないように、詳しい病状は教えてもらえないのだ。両親とも、とても気を使ってくれている。

そして、俺の大学2次試験までちょうど1週間になった日。綾の両親が話があると言ってきて、お父さんが話し始めた。

「健太君の試験まで1週間だね。だが綾は変化がないのはよく知っていると思う。ずっと綾の側にいてくれて、とてもありがたく思っているんだ。ただ、大学受験というのは、君の人生を大きく左右するものだ。今まで、君が頑張っていた事は十分知っている。しかし、やはりこの最後の1週間は100%勉強に集中してほしいんだ。君が大学に合格する事が、綾にとって、我々にとって一番の願いなんだよ。だからこの1週間、ここには来ないで、勉強の事だけ考えてくれ。もし綾に何か変化があっても、君の試験が終わるまで連絡しない事にする。悪く思ふのなら思ってくれて構わない。試験が終わってからまた会いに来てやってくれないか」

このお父さんの言葉から、提案ではなく、強い気持ちを感じられた。綾の事を考えないなんて出来るわけないが、「俺が受かったら綾は元気になるんだ」と思うようにすると決めた。

「わかりました。綾に手紙だけ置いて行きますね」
そう言つて、綾に手紙を書いた。

“綾へ

おはよ。大変だったね。頭痛くないか？

俺は今から来週の試験に向けて勉強します。綾の近くにいたいけど、綾のために合格目指すよ。綾のお守りはすごい効果だから、今回も力を貸してね。

それじゃ、行ってきます。

健太”

手紙を書いてから、綾のカバンの中から筆箱に付いてるお守りを取り出した。そのお守りと手紙を、ベットの横の机に置いて「行ってくるね」と言って病室を後にした。

7章

試験はどんな問題だったか覚えていない。頭で解くというより、手で解いていた。

試験が終わって、その日のうちに帰って来たが、もう面会時間は過ぎていたため、明日行く事になってしまった。少しでも早く綾の様子を知りたくて、お母さんに連絡を取ろうとしても、つながらない。嫌な予感がした。

その日は全く眠れず、次の日朝早くに病院に向かった。まだ面会時間まで1時間ほどあったが、外来患者に紛れて綾の病室に行った。変な緊張が体を包んでいた。

そして病室の前に着き、大きく息をしてからドアを開けた。何も見えなかった。

正確に言うと、そこに在るべきものが見えなかった。

綾がいない。ベットはきれいに整えられていて、机の上に置いた手紙もお守りも無い。

俺は目を閉じた。そして、さっきより大きな息をした。

「なんで…」

その時、後ろから肩をたたかれた。振り返ると、綾のお母さんがいた。

「お疲れ様」

と言って、少しだけ微笑んでいるように見えた。

「あの…あの…」

俺が何とかして言葉を探していると、お母さんは何も言わず歩き出した。わけも分からず、しかし、後について行った。

ナースステーションの前で待つように言われた。俺は、ナースコイルの名札に、綾の名前があるか探した。が、字が小さすぎて見えない。目を細めて探していると、

「おかえり」

後ろから声がした。

「綾」

俺は振り向く前にそう言ったと思う。振り向くとそこに綾がいた。点滴をしているが、普通に歩いている。また言葉を探していた。

「おかえり、健ちゃん。試験どうだった？」

いつもの綾の声だ。なんでこんなに普通なんだと思うくらい、俺の知ってる綾だった。

「…ただいま」

それしか言えなかった。

2人で、中庭が見える所のベンチに座って少し話した。

「健ちゃん、泣いたらしいやん。お母さんから聞いたで」

いつもの「いたずら笑顔」だ。

「暖かい病室に入ったから目が曇ったんだわ」

「へえ」

と、楽しく話していたが、何かスイッチが入ったかのように綾の様子が変わった。

「怖かった…なんかね、健ちゃんやお母さん達が話しかけてるのが聞こえる時もあったの。だから返事してるつもりなのに、何も見えないし言葉も出ないし。このまま二度と話せないままなのかなとか考えると…本当に怖かった」

まるで何かから開放されたかのように涙を流した。

「きつと健ちゃんのお守りのおかげね。ありがとう」

また笑顔を作りながら言った。

「綾のお守りもかなり効いたよ」

「そう？嬉しいな。なら4月から健ちゃん大学生やん」

「んー…まだ決まってないけどな」

「私は来年も受験生やわ。でも、大学生より受験生の方が若く聞こ

えるよね」

「それは俺が年寄りだって言ってるのか？」
「ん、どうでしょう」

綾は元気になった。俺の試験の前々日に意識が戻り、次の日には4人部屋に移ったらしい。実は、東野高校では綾の意識が戻ったと知らされていたらしいが、洋介はわざと俺に教えずにいてくれたという事だった。アイスもう1個おごってやろう。

そして3月上旬、俺の結果発表と綾の退院の日が同じになった。これを運命と呼ぶんだな。俺は無事合格。綾にすぐメールで報告したら、

「じゃ今から公園でお祝いしよ」

って。公園でお祝い？と思いながらも、俺達の思い出の場所でもある公園に行った。

「退院してすぐに外出て大丈夫」

「少しならいいって言われたから。健ちゃん、おめでとっ」

プレゼントもくれた。

「おお、ネクタイやん。ありがとうな」

「いえいえ。入学式にでもつけてね」

「もちろん。つけたら写メ送るよ」

のんびりした天気だ。

「受験前の大事な時に、迷惑かけてごめんね」
いきなり綾が言った。

「なんで綾が謝るんよ。悪い事してないのに。それに、綾が好きで毎日近くにいたんだからさ。あと、いい事教えたる。誰かに何かしてもらった時に、『ごめんね』って謝るのはよくないんだよ。そんな事言われると、何かした方もされた方も気持ち悪いやん。そういう時は『ありがとう』って言うんよ。ありがとうってどういう意味

や？」

「どういつて？」

「漢字2文字で」

「感謝」

「そうやる。『ありがとね』って、お礼を言いながらも、迷惑かけちゃった事を謝る。『感謝』の謝ね。だから、人に迷惑かけてしまったと思っても、その人が助けてくれたんなら『ありがと』って感謝するとなえよ」

「そっか。なら健ちゃん、ありがとね」

そう言つて、軽くキスをしてきた。

その後のノロケ話は省略しておくよ。聞きたくない人もいるだろうからね。

4月から、それぞれの新しい道が始まった。俺は普通の大学生。ゴールデンウィークや夏休みなど、何かあったら3時間かけて帰省していた。別にホームシックじゃなくて…

頼まれてもないのに、綾の勉強を見るためだ。

その甲斐あつてか、綾は無事、県立の看護大に合格した。

俺と綾の色々な出来事はこのあたりでおしまい。2人とも大学生を頑張ってるよ。俺は2年後に就職して、地元に戻るつもりでいる。これでまた綾と一緒にいられる時間が増えるぞ。

綾、今まで色々あったけど、ありがとね。そして、これからもよろしく。

俺と綾はずっと一緒だから。ずっとね。

||
||
||
||
終
||
||
||
||

7章（後書き）

初めて書きました。色々な感想を聞かせてもらいたいです。よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2047d/>

ありがとう

2010年10月8日14時40分発行